

人権・道徳講演会

先週7日の午後、NPO法人「全国骨髄バンク推進連絡協議会」の理事長である田中重勝さんを講師にお迎えして、人権・道徳講演会を実施しました。田中さんは、1989年9月、日本初の血縁関係にない人への骨髄提供者となりました。骨髄移植は、患者とドナー（提供者）の白血球の型が合わないとできません。よって、全国の関連団体はできるだけ多くの人にドナー登録をしてもらおうと日々、取り組んでいます。田中さんは、日本初の骨髄ドナーとして、2002年2月にNHKで放送された「プロジェクトX 挑戦者たち 決断 命の一滴 ～白血病・日本初の骨髄バンク～」の中に登場しています。多くの困難を乗り越えて、日本初の骨髄バンクを設立し、普及活動を行っていた人々のそれぞれの思いが番組内で描かれていました。

昨日の「世界人権デー」で人権週間は終わりましたが、全校一斉の道徳授業、絵本の読み聞かせ、人権・道徳講演会等を通して、これからも人権やいのちについて、考え、行動し、発言する生徒になってほしいと思います。以下、朝礼の様子をお伝えします。



○ 生徒会役員より

先週のベーシックテストが終わり、今日結果が返ってきます。合格点だった人もそうでなかった人もそれぞれの結果をばねに、最後の学年テストに生かしてください。学校・学年行事がひと段落して当分ありませんが、目標を決めて計画的に生活しましょう。

○ 伝達表彰

- ・ 税に関する作文 入選：3年女子1名

○ 加藤雅也先生の話

「ありがとう」という言葉があります。「ありがとう」の対義語は、「当たり前」です。「ありがとう」という言葉には、「有ることが難しい、滅多にない」という意味があります。皆さんは、今、中学校に通っています。学校に通って勉強するということを「当たり前」と思っていないですか。世界の国で、学校に通う子供たちを紹介します。

ケニアのサムブル族のジャクソン君(11歳)は妹のサロメさん(7歳)と、片道15kmの道のりを2時間かけて学校に通っています。小走りで横切るサバンナの草原には、ゾウやキリン、シマウマなどの野生動物が生息しています。ケニアでは毎年、4～5人の子供が象の襲撃に遭い犠牲となっています。そのため、1mほどの木枝を手に携えて周囲の状況にたえず気を配り、危険を感じたら草陰に身を潜めて様子をうかがいながら学校に通います。象の群れを避けるためにさらに遠回りをして学校に行くこともあるそうです。ザヒラさん(12歳)はモロッコのアトラス山脈の辺境に生まれ、家族の中で初めて学校に通うことになりました。冬になると気温はマイナス20度まで下がり、数か月にわたって雪が降ります。片道22kmを月曜の朝早くに家を出て4時間、途中で友達2人が加わって歩きます。街に入ると、手提げ袋に入れて来たニワトリを食料と交換します。寮での生活を5日間続け、金曜の授業を終えると家路に戻る生活を送っています。アルゼンチンのアンデス山脈で、羊飼いの息子として生まれたカルロス君(11歳)は、片道18kmの道のりを馬に乗って学校に通っています。妹のミカイラさん(6歳)が学校に通う年齢になったので、1時間30分、馬は2人を乗せて学校に向かいます。天候が変わりやすい石ころばかりの山道を踏み外さずに歩む馬を見て、大人になったら獣医になって、地元に貢献しようと思っているそうです。

この話は、ドキュメント映画『世界の果ての通学路』に登場する実際にいる子供たちです。ケニアのジャクソン君とサロメさんは、「なぜそうまでして学校に通うのか」という質問に対して次のように話しています。『学校までの道のりはとても大変でしたが、それは知識を習得するための道のりであり、その知識はのちの人生に役立ってくれるものです。自分の将来を救ってくれるのは、教育しかありません。たとえ学校に行く道に危険はあっても、学校に行くこと自体がよいことなのです。未来がいいものになるなら苦じゃない。学校は明日のためにチャンスをつかむ場所です。もっともっと勉強がしたいです。将来、自分と家族の助けになるために』。もう一度言います。「ありがとう」の対義語は「当たり前」です。

